

けんしらぎし ばんか  
遣新羅使の挽歌

いきのしま いきむらじのやけまる こつぐうきびよう  
到壹岐嶋 雪連宅満 忽遇鬼病 死去之時 作歌一首

(天平八年、万葉集卷一五の三六九〇 詠み人知らず)

いきのしま  
【訳】壹岐島に着いた時、雪連宅満が急に鬼神に取り憑かれたよう  
な不思議な病に遇って死去した時に作った挽歌を一首捧げる

つね  
世の中は常かくのみと別れぬる

もとな あ こひ  
君にや元無 吾が孤悲行かむ

【訳】世の中はいつもこうして別れが来るものなのか

君への どうしようもない悲しみを、

私は一人抱えて、旅を続けるのか

大宝元年(701年)に施行された国郡制により、壹岐島には壹岐

いしだ  
と石田の二郡が置かれた。天平八年(736年)には阿倍継麻呂を

正使とする遣新羅使が浪速津の港から、瀬戸内海を通り、壹岐、対  
馬を経て新羅に渡ろうとする。一向は途中、周防灘で嵐に遭いなが

らも、壹岐島に着いたが、随員の雪連宅満(伊伎宅麻呂)がにわか  
いきのやかまろ

に疫病を発症し亡くなってしまふ。遣新羅使の仲間内の誰かが、宅

麻呂の挽歌として作った。宅麻呂は「連」とあり、高官である。

姓は雪の一字、名は宅満と二字であり、支那の渡来人である。

遣新羅使は数年毎の往来があったから、今日のコロナウイルスの  
流行であったのかも知れぬ。新羅からの使節は都に入れず、太宰府  
止まりにされた期間もあったようだ。

宅満は石田に葬られた。石田とは石のある田圃ではなく、開墾に適  
さない土地と云う意味である。壹岐はやはり漁業の島である。

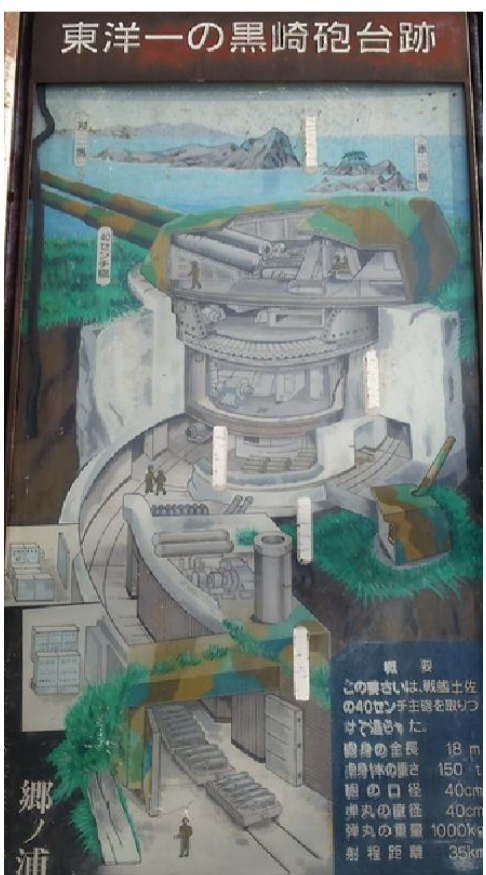
壹岐には「雪の島」という海中から顔を出している岩、黒崎砲台、  
猿に見える「猿岩」が名勝としてある。

令和五年四月二十七日

大中臣正比呂



勝本町本宮触 浦海岸の「雪の島」



郷ノ浦